

七、逆水灌概^{ぎゃくすいかんがい}

84

(一) 日照りになるとこんなに困る

野田にいる、いとこの野村君より北村の沢耕造のところに暑中見舞が来た中に、

「今年の夏は日照りが大へん長く続き、私たちの村では、発動機で毎日田圃に水あげをしています、そちらの方はどうですか。」

と害いてあった。耕造は返事を書こうとしたが、それまでに野田がどこかをしらべておこうとして、前に買った野洲郡地図を広げてみた。なかなか野田が見つからないでいるうちに山に近い方に青くぬった池がたくさんあることに気がついた。さらによく見て行くと「野田」と言うのを湖に近いところで見つけた。この近くには野田沼干拓地をはじめ、^{すいけい}「水荃内湖干拓地」とか「須原沼干拓地」などと干拓地の多いことにも気がついた。もっと地図をよく見ると野村君のすんでいる野田から川がまっすぐに私の村の方についていて、途中できれてしまっているのに気がつき「これは不思議だなあ。どうしてだろう。」と考えましたが、よくわからない。そこでお父さんに夕御飯の時に聞くことにして返事を書いてしまった。

85

お父さんは今日も田圃へ水入れに行かれて昼はおられない。いつまで続くか知れない日照りに農家の人々は口ぐせのように「雨が一降りほしいですなあ。」ともらしている。中には、晴れわたった空を、ただうらめしそうに見あげている人もある。

夕食前にお父さんも「ああ、こう日照りが続いちゃたまらん。」と言いつつ帰って来られる。お母さんも「ほんとにね、早く一降りあればよいのに。」と相づちを打っておられる。

みんながそろっておいしく夕御飯をいただきながら、

「お父さん、僕今日ね、野村君に返事を書いていて野田をさがすために、ふと、地図を見たんですよ。そうしたら山の方に溜池がたくさん出ていたのですが、どうして、そんなところに、たくさん池があるのかわからないんですよ。」

父「それはね、私たちの家も、この祇王村も、滋賀県も、日本ぢゅう全部がお米をとる仕事をおもにしているだろう。お米を取ろうと思えば、どうしても、水が必要になって来る。その水が田植の五・六月頃は梅雨と言ってよく雨が降る時期なのでよいとしても、年によっては降らない時もあり、大切な時に降らずに、取り入れ時のような降らない時に降ったりして大へん困る時があるだろう。今年などは水のほしい時に降らないことになるだろうなあ。また田圃が高く

86

て水がどうしても入りにくい所などもあるだろう。そういう時や、ところに、いつでも水が近くにあれば困らないから、そのために池

を掘ったのだよ。言いかえれば、水がたりなくなった時に使うために池をつくり、ためてあるものなのだよ。」

耕造「今年もずい分長く雨が降りませんがお父さんは毎日どういう仕事に行っているの。」

父「近頃は水を入れるのも大変便利になってね、電気で水をあげるんだよ。お父さんが毎日行っているのは、停電したり水あげ機械に故障が起らないように番に行っているのさ。昔はずいぶん苦勞したもののだがね。」

耕造「どんなに苦勞したの。」

父「池にためてある、とぼしい水を広い土地に入れようとする、おたがいに、慾が出て口論をしたり、また、部落と部落の争いになったり、村どうしの争いになったりして、すいぶん、いろんなことが起っているんだよ。お父さんなども小さい時は、日照りが続くと毎晩家の者が交たいで自分の家の田を見に行ったものだよ。こうした争いをさけるために、二・三人共同で池を掘ったり、個人で田の一部をさいて「わく池」を作ったりした人もあったんだよ。それから。」
と言いながらお父さんは何かとりに行かれた。

87

(二) 水あげに使われた道具

しばらくしてお父さんは、一枚の絵を持ってこられた。それを出しながら「昔は水をかえるのに、こんな道具を使っていたのだよ。耕造も時々使っているのを見ることがあるだろう。」

耕造「ああ、これは見たことがある、池の魚をつかむ時など水をかえるのによく使っているね。名前は何と言うの。」

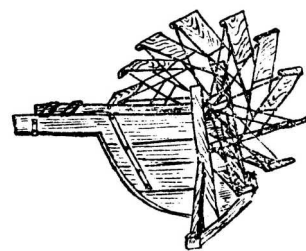
父「名前はね『蛇車^{じゃぐるま}』と言うのだよ。そのほかに水をかえる道具には『龍こし^{りゅうこし}』とか『つるべ』『ごい』等があるがね、『龍こし』は本当の名前は龍骨車^{りゅうこつしゃ}と言うのだ。」

耕造「『ごい』だなんて、ごいと力を入れて水をくみあげたら、今にも水が上って来そうな変な名前だね。」

父「そうだよ、今耕造の言ったように箱の中に入った水を力強くごいと板ですくって来るから『ごい』と言うのさ。」

耕造「どんなふうにして使ったの。」

父「蛇車は車を入れるわくの外に竹か、くいを二本たてて、蛇車を結びつけ、人は車の上に乗って車の上を歩くのだよ。この車に水があたらなくなるまで水をかえることが出来るんだ。これは一人で水かえが出来、しかも割合らくに出来るのでよく流行したものだ。龍骨車や、つるべ等は祇王村では、ほとんど使っていないのだよ。」



(水あげに使った蛇車)

88

耕造「どうしてですか。」

父「昔に祇王井川が完成していて、その恩けいを受けているからさ。

他の村では非常に苦労しているところもあるんだよ。」

耕造「祇王村はいい所ですね。でも祇王井川がなかったら本当に困るだろうなあ。」

父「そうだよ。だがね、日照りが来てもいいようにいろんな準備をしておかねばならないから、いそがしいよ。例えば『ひ』のふせかえとか、水路の川ざらえとか言ったこともあり、北村の沼地のように、いつも水を満水にしておかねばならないと言ったようなこともあるわけだ。」

耕造「それからね、お父さん。」と何かとりに行った。

(三) 童子川沿岸耕地整理組合

しばらくして耕造はお父さんの前に昼見っていた野洲郡地図を広げて、

耕造「お父さん、この地図は少しおかしいと思うのですが。」

父「どこがだね。」

耕造「だってよく見えていますとね、新川の川上が童子川の所でできて

しまってい
るし、深沢
の池や沼が
今でも書いてあるでし
ょう。」

父は地図を
見ながら、父

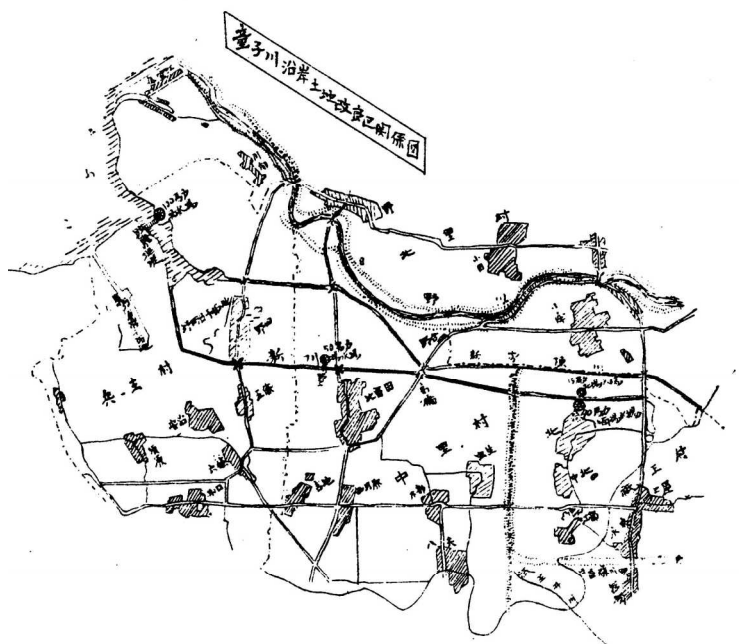
「うーん、よくしらべた
ね。たしか
にこの地図
はちがう
ね。新川は
もっとのび

て朝鮮人街道までこなければならぬし、深沢は昔のままの様にな
っているね。」

耕造「新川をまっすぐに下っていけば、野田の野村君の所へ行けます
ね。」

父「ああ、行けるよ。」

耕造「どうして大きなしかも、まっすぐな川を作ったのですか。」



90

父「新川についてのいろいろのくわしいことはおじいさんがよく知っているから、後で聞きにいくとよいが、まあ私の知っている事だけでも話をしてあげよう。」

昨年から童子川沿岸土地改良区となっているが、前は童子川沿岸耕地整理組合と言うのがあって、これを県営によって行っていた。その範囲も非常に広く、この組合が出来た当時は祇王村北、中里村比留田、虫生、兵主村野田、安治、五条、井ノ口、北里村野ヶ崎、と言う各部落が参加していて田の広さにして五〇〇町歩（約五〇〇ヘクタール）あるのだ。実は五〇〇町歩にしないと県営にならなかったからだよ。組合が作られたのは昭和六年なのだが、組合を創設するまでに四年の長い間かかっているのだ。」

耕造「どうして、そんなに長い間かからないと出来ないの。」

父「それは祇王村だけがやろうと言ってもだめなのだ、なぜかと言えば祇王村は川の上にあるために川しもが『いやだ』と言えはいくらさわいだところで、どうにもならないだろう。たとえば川に水が多く出て来た時に川しもで止められたら水がはけないでたまってくる。これが低い土地に流れこんで白波の立つ田となってしまうと言うようなこともあるだろう。だから川しもの意見もよく聞き、こちらの考えもよく話して、けんかをしないように、うまく納得してもらわないと後で困るからね。それには、ちょっとや、そっとでは話がつきにくく、四年の年月がかかったわけさ。」

耕造「すいぶん長くかかるのですね、それ以前にはこうした組合等はなかったのですか。」

91

父「あったのだよ、しかし組合と言ったようなものでなく、童子川流域耕地整理促進会等と言うのが大正十四年三月頃すでに出来ていて、その地盤はきずかれつつあったのだよ。」

（四） 工事の出来たわけ

耕造「さきにお父さんは童子川沿岸……何やら言ったね。」

父「ああ少し長くむすかしい名前だが、もう一度言うと、童子川沿岸耕地整理組合と言うのだよ。」

耕造「ああ、その耕地整理組合ですか、どんな仕事をするの。」

父「それはね、こうなんだ。簡単にわかりやすく言うと三つにわけることが出来るのだよ。その一つは、野田沼内湖から百馬力によって水を逆水させ、日照りの時に灌漑すると言うのだ。二つめは童子川の排水工事をするのと、今一つは家棟川の川上にダムを作り砂防と急激な水位の上昇を防せごうとしたのだ。」

耕造「三つの計画があるようですが、それが全部無事に出来たのですか。」

92

父「なかなか耕造が考える程簡単に計画通り完成するものではないのだよ。耕地整理組合として五〇〇町歩をその中に加入さすまでもずいぶんかかっているだろう。それが滋賀県で最初の県営工事として童子川流域のかいしゅうををすると言うのだから大変なのだ。この組合として最初に着工して完成したのは、野田沼の江口揚水場附近に百馬力の揚水機をすえることが出来たのみで、大した効果は上っていなかった。県側はその間何回か、計画の説明会を行って承知をしてもらう様つとめたが、なかなか意見の一致はむすかしかつたのだよ。この村の北村でも耕地整理組合に加入することは非常に問題になって七・八割までが反対したのだよ。」

耕造「なぜそんなに反対するの。」

父「それは、こうなのだ。詰をしないとわからないが、新川を作って、排水と逆水とが行われなかったならば、北村はこの組合に加入しても効果はないわけなのだ。ところがこの逆水工事を行うことについては、兵主村五条が強く反対していたのだ。それは新川をつけるために五条の地がけずられる上に五条は安治からように水を受けることが出来るので新川を作ってまでの逆水工事には賛成出来ないと言うわけさ。だから五条としては県の方へ作らさないよう強く話をしていたのだ。ところが一方、北村は逆水工事を作ってもらわなければ組合加入の効果がないから、ことある度に強く作ることを主張したのだ。五条の「作るな」という意見と北村の「早く作れ」という意見を県ではどうまとめたか耕造は思う。」

耕造「さあ、わかりませんね。」

93

父「県としては、どちらにも賛成出来ないだろう。一方に賛成してしまったら、せっかくの組合は、けつ裂してしまつて大変なことになる。そこで先ず県は五条を説得にかかったのだ。どう言ったかと言うと、新川を作るために減った土地は五条の近くにある池を埋めることによっておぎなう様話を進め、やっと了解を得たのである。新川の改修工事をやらなかったら、野田に百馬力をすえて揚水した所で曲りくねつた前の新川では中里村の高橋附近までしか水が逆流しなかつたのだからね。北村あたりまで全然関係がないのだから組合に加入していることがむだだと言うことがわかるだろう。そこで反対者も多かつたわけさ。しかし当時の部落長さんの遠い将来を考えての非常な努力、反対をおし切つてまで、やられた強い信念によつて、現在の様なりっぱな新川が出来、どんな日照りにも平気でいられる村となることが出来たと言うものさ。又上屋の深沢は新川に排水することにより美田となり、排水の便は非常によく論場の争いもなく、東祇王井川の水は静かにゆうゆうと流れる、実に一石三鳥の実現と言わねばならないね。」

耕造「すいぶん部落長さんも大変だつたでしょうね。」

父「そらそうさ、口では言えない苦労があっただろうよ。」

耕造「それから、他の計画は、どうになりましたか。」

94 父「ほかのはね、ちょうど昭和十六年に家棟川の決潰に会ってから話が急激に発展し、県常に於いて着々と実行に移されて行ったのだよ。家棟川が決潰するまでは、祇王村では北村と上屋の一部こそ利を受けていたが、富波等は込田には相変らず水が付き、何の効果もなかったのだよ。ところが家棟川が切れてからは『ダム』が完成され、家棟の水は新家棟川となって方向をかえ込田の水はけもよくなり、ここに童子川沿岸耕地整理組合の恩けいを受けるようになったのだよ。ついでだから話すと、最初県の計画では、童子川の水を改修された新川におとすつもりだったらしいのだよ。ところがこれに対して、虫生其の他から強い反対があり、実現しなかったのだ。」

耕造「何んだか話を聞いていると、祇王村のために耕地整理組合を作って排水や逆水を考えてくれているようですね。」

父「そうでもないさ。新川の沿岸はほとんど、どこでも新川の水を逆水しているのだからね。しかし耕造の思っているよう半分以上は祇王村のために、と言っても言いすぎではないと思うね。まあそれだけこの村の人たちは水になやまされて来たとも考えられるね。」

(五) どこから水が引かれたか

耕造「お父さん、野田のどこから水をあげているの。」

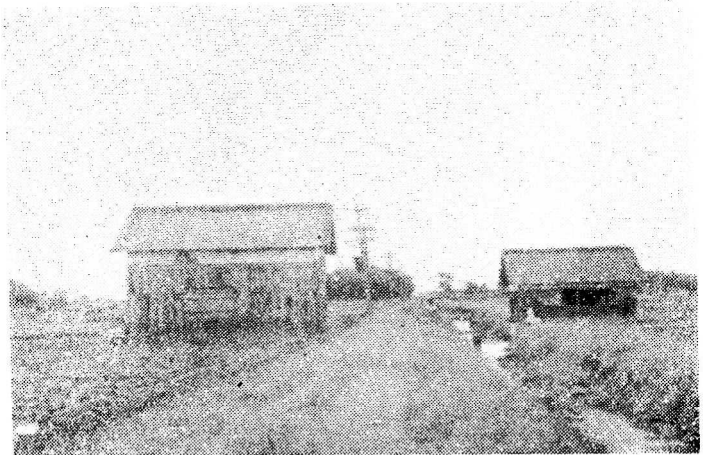
父「野田内湖の出口に江口揚水場をつくってその近くで水を揚げているのだ。」

95 耕造「どうしてこの私達の村まで持ってきているの。」

父「野田で百馬力で揚げた水は地図に書いてある、新川の水路を通して上にあがってくるのだよ。」

耕造「野田で揚げただけで祇王村まで来ますか。」

父「最初は来たのだ。ところがね、昭和十八年に高木、小南が逆水灌漑に加入してからは、水がたりなくなり、加入した一年は水不足で川しもで揚水するのと、こちらで揚水するのと交互にして



(北村、小南、高木の揚水小屋)

もらった事もある程なのだが、こんな事ではだめなので、比留田のはずれ、野上に五〇馬力のモーターをすえて野田から揚げられた水を更にここで揚げ、そして祇王村までもってきて北村、高木、小南の揚水場になっているのだよ。」

耕造「写真を見ますと二つならんでいますますがどちらが北村の方ですか。」

96 父「北村のは、新川の北側にある小さい方なのだよ。前の方にある大きいのは、小南、高木の揚水場なのだ。ここでは、北村は十五馬力のモーターで水揚げをしているし、小南、高木は砂山のところまで持ってあがらねばならないし、広く遠いので四十馬力のモーターをかけているのだよ。」

耕造「おかしいですね。小南に近い方側に小南の揚水場があっていいはずなのに逆に北村のがあり、北村に近い方に小南のがあるなんて。」

父「そうなのだ。だがそれでいて、けんかしないように出来ているのだよ。新川の堤防があるだろう。その堤防の下を通っていてね。北村のは朝鮮人街道につきあたったところで土管の口が出ているよ。小南のは砂山のところへ口を上向けて出ているがね。」

耕造「北村のは朝鮮人街道につきあたるところに口があるなんて、これからどうして田に水をまわすの。」

97 父「逆水の時、土管の出ている少ししもに板で水をせきどめる様にコンクリートで作られているから、まず板をはって、水をせきとめると揚水された水は朝鮮人街道をくぐり東祇王井川に流れ出て各『ひ』をくぐって、北村の田圃をうるおすことになっている。だから排水川としての東祇王井川は日照りになれば逆に揚水川としての東祇王井川に早変りするわけだね。」



(排水口は早変わりして逆水口へ)

耕造「小南に近い方側の北村の土地はどうして水をまわすの。」

父「土かんのすぐ近くに街道にそって小さい川があるから、それによるよ。」

耕造「水をはき出す『土管』の大きさは十五馬力でどれ位なの。」

父「ええと、さしわたし一尺(三〇センチメートル)だったと思うが。」

耕造「一時間にどれ位田に入るものなの。」

父「さあ！それは知らんね。お父さんもしらべるから、耕造も一度何かでよくしらべてごらん。」

(六) 工事の完成するまでの苦心

耕造「新川改修の工事は大体何年位かかっているの。」

父「ええ、工事にかかったのが、たしか昭和十一年で完成したのが十五年だと思うから約四年間はかかっているね。」

耕造「すい分長くかかっているのですね。」

父「そらそうだよ。なにしろ今までの新川を大きくしたのだからね。」

98 耕造「お父さん、ちょっとおかしいじゃありませんか。今まであった新川を大きくするのならかんたんで、早く出来なければならないと思いますが。」

父「いやいや、それが反対なのだよ。田に新しい川を真っすぐに掘るのは、土はやわらかくもなく、かたくもないから、らくなのだが、今までにあった川をひろげるとなると、川の土はどろどろで、どうにもならないごみなのだよ。それに川の両側には、くいを打って、『くい』と『くい』の間は、『こわ』をはさんで、土が落ちこまないようにするのだが、かんじんの「くい」が土がやわらかいために、打ち込んでもきかないのだよ。ちょうどぬかに釘を打っている様で土を入れるとすぐに倒れてしまうと言う始末で、そのために普通の地ならば一本の『くい』でよい所を新川の工事には川の両側に打つ『くい』と、それが倒れないように別に『くい』を打って針金でひっぱらねばならないと言う二倍も、三倍も手間の入るまことに面倒な工事だったのだ。」

耕造「童子川の下を通っている『ひ』は僕も通って見たがずいぶん大きいなあ。」

父「あれがね、昭和十五年につけかえられたもので、さしわたし九尺二寸（約三米）もあるのだよ。昔は、これの七分の一の大きさなのさ、今の七分の一だと、どれだけになるかな、計算してごらん。」

耕造「ずいぶん大きいなあ、僕の身長の上二倍以上あるのですね。」

99 父「そうだよ。それから、こんな話も当時聞いたことがあるよ。最初は逆水も北村にこなく組合加入に非常に反対され、その上工事半ばで北村の下に水がつくと言った様なこともあり、非常に部落長は困られたのだが、たまたま昭和十四年に早ばつにあい永原、北村は非常に困られたことがあるが、その時、ちょうど新川は北村の中途まで出来ていたので早速新川を利用し、発動機のポンプ六・七台をすえ、日夜水あげをしたために、北村は早ばつの難をのがれることが出来、ここに北村の人々は、はじめて逆水工事の大事なことを認識したと言われている。」

(七) 逆水灌漑によって受益されている面積

耕造「新川が出来て灌漑はどれ位の広さになっているの。」

父「大体今では篠原村の小南、高木も入っているので五ヶ村にまたがり、田の広さにして約八三〇反（約八百五ヘクタール）に水をうるおしているわけである。」

耕造「全体では八百五ヘクタールですけれども、祇王村では、どれ位の水を受けているの。」

父「祇王村も加入しているのは、北村だけで、灌漑を受けている面積は大体三〇〇反（三〇ヘクタール）に及んでいる。」

耕造「去年はどの位あげたのですか。」

100 父「去年は、天候も順調で非常に水のまわりもよく、機械は使われなかったのだよ。日数にして、十五馬力のモーターを二昼夜動かしたただけなのだ。少ないだろう。下の童子川の近くにあるのは少しも動かしてないのだからね。ここで一つ時代が変わって来て水利についてむずかしいことが去年から起って来たのだがね、それは野洲川のダム completion により祇王井川の水が大変豊富になって来たために北村まで充分水がまわって来ていると言うことは、見のがせない事実だよ。この村としては、野洲川の水利組合にも加入しているし、童子川の水利にも加入しているから両方に出す負担金も相当に多くなって来て問題は非常にむずかしく、今後にのこされているのだよ。」

耕造「よくわかりました。大へん参考になりました。人々の努力でこの村もすい分立派になって来たが今後も問題は、たくさんありますね。」

父「そうだ。もういいだろう。大分時間をとった。また水あげ場に行かなければ……。」

と言って立ち上られた。